



カメラ探訪

文学のふるさと

その18 中央町払川



詩集妾薄命

— 高群逸枝 —

「払川は静かな朝だった。「出世しなほりえ」「出世します」街道に出てふり仰ぐと、見なれたふるさとの山、とくに白山と釈迦岳が高く晴れて。私になにか語りかけているようだ。「日本女性史」の執筆者、高群逸枝は大正9年結婚と同時出京した。

では古里よ
妾はまたもお前の村々を漂然と
立ち去るに違いない

わたしの
ふるこの
郷土

球磨郡上村立皆越小学校 六年 溝口昭博

八代海にそぐ球磨川をさか上って人吉の町を通り過ぎたところに、球磨盆地があります。その南側にぼくたちの住む上村があり、ぼくたちの学校のある皆越は、それからさらに南にはいったところにあります。

球磨川の支流、免田川の美しい流れと、四季によって色のちがいをみせる白が岳や、小白が岳を望む自然の美しさはすばらしいものです。海拔四百六十メートルのところあたりに、ぼくたちの皆越小学校があります。生徒は、全員で七名の小さな学校です。

皆越には、五十戸ほどの家が、谷やしゃ面に立っており小さな店も三つほどあります。うちの母や地区の人は、いろんなものを、そこで買いますが遠くの免田や人吉まで買いに出かけることもあります。

皆越地区の仕事は、主に農業・林業などの兼業農家で、ぼくの家もその一つです。山のしゃ面を切り開いてつくってあるたな田には、米がほとんど植えられています。ぼくの家では、このほか、い草もつくるようになりました。畑には、茶・くわ・とうもろこしなどがつくられます。農家は、今若い人が少ないので機械をつかって仕事をしています。

山にかこまれているので林業は、みんなの収入の大切なものの一つです。木を切ったり植林したりする仕事にひまなときは出かけています。

皆越は、歴史の古い所です。その一つは、皆越城があることです。ふつうの城とちがい山を利用した山城だったそうです。でも今は木や草におおわれて城のあととはわからないくらいです。

皆越には、白が神社があり、祭りは毎年十一月二十八日に行われています。この祭りは豊作を願って、たくさんのおみやげやおもちをほうのうするのです。前夜祭も行われ、ぼくたちは、毎年の楽しみにしています。もっと人口がふえればもっと楽しさもふえると思うのですが、思うようにはいきません。

皆越にいつから人が住みついたかは、はっきりしません。ぼくのおじいさんの話では、明治十年の西南戦争で皆越の家は、ほとんど焼かれたそうです。そのとき、ぼくの家のある大きな柿の木も焼け、その焼けあとが今でも残っています。

皆越は、昔は皆越村でしたが、明治のころ上村といっしょになって一つの村となりました。溝口・皆越家だけで十戸以上もあります。今から二十年前は、白が岳の向うに八がむねと言われるところがあり、皆越の一部だったそうです。今では、もうはい校になっています。

ぼくの皆越小は、なかまは七人ですが、先生たちといつも遊んだりして楽しいところです。昨年は、山いもほりをしたり、あけびをとったり、竹馬づくりをしたり柿むきをしたりして、よその学校にできないことをして楽しんでいきます。清流と、緑と、おいしい空気ときりのかからない太陽にめぐまれて、上村の皆越は、生きています。